

麦類の低温予措効果に関する試験
第2報 麦類種子の低温予措が生育状態成熟期子実収量に及ぼす影響試験

岩下友記*・相星幸雄*・持留一成*

IWASHITA, T., AIHOSHI, S. & MOCHIDOME, I. Experiment on the Vernalization Effect of Wheat and Barley

2. Influence of Vernalization on the Growth, Date of Maturity and Yield of Wheat and Barley

1. 試験方法の概要 28年度は11月23日播に小麦4品種、稈麦2品種、大麦2品種を6~7°C 28日間、12月20日播に小麦4品種、稈麦5品種、大麦1品種を3~6°C 30日間、1月23日播に小麦4品種、稈麦3品種、大麦1品種を2~5°Cで34日間予措して試験した。29年度は11月25日、12月15日、1月15日の3回小麦農林60号ハタマサリ、稈麦白麦8号鹿兒島稈、大麦魁を0~3°C 35日間予措（但し12月15日播ハタマサリ、魁は欠）して試験した。耕種法は鹿兒島県農試水田裏作麦耕種法に準じた。

2. 試験結果（29年度試験を主において述べる）

（1）発芽状態 予措区は全般的に発芽期は若干お

くれ発芽の良否整否は整または中程度で無処理催芽区より少し悪かった。

（2）生育状態 （イ）草状。匍匐型の品種は予措することによつて中間又は直立型の草状を呈する。

（ロ）草丈。各品種とも生育期間中の草丈は予措区が高い（但し白麦8号の晩播区は予措区が低かった）。

（ハ）葉数。生育期間中の葉数は全区とも予措区が少い。（ニ）最高分けつ期。播種期が同時なら予措区と無処理催芽区のそれは略同時期である。

（3）出穂期 （イ）農林60号11月25日播12月15日播区は予措区が2~3日早かった。（ロ）ハタマサリ11月25日播区は2日早かった。（ハ）白麦8号11月25日播区は同時、晩播区は予措区が1~2日遅

* 鹿兒島縣農業試験場

れた。(ニ) 鹿児島稈11月25日播は予措区が5日早く他の区は大差がなかつた。(ホ) 魁は各播種期とも予措区が約2週間早かつた。

(4) 成熟期 (イ) 農林60号ハタマサリは予措無処理催芽両区間に大差はない。(ロ) 白麦8号晩播になるにしたがい予措区が2~3日おくれた。(ハ) 鹿児島稈11月25日播区は予措区が6日早かつたが晩播区は差異なし。(ニ) 魁各播種期とも予措区が5~10日早かつた。

(5) 稈長 供試全品種とも予措区は短かくなつたが晩播になるにしたがいその差異は小さい。

(6) 主稈出葉数 予措区の出葉数は少なくなる。特に予措による出穂促進日数が大なる品種ほどその差異は大きい(但し白麦8号は普通播晩播ともに差異なし)。

(7) 有効莖歩合 各品種各播種期とも予措区が高く生育中分けつの多い品種ほど差が大きい。

(8) 子実収量 過去2ケ年の試験結果では増減についての結論は未だ見出し難いので30年度まで試験を継続する。

3. まとめ 生育においては草丈、莖数、有効莖歩合、稈長、主稈出葉数などが変化する。出穂期成熟期は従来早生で秋播性の高いと云われる品種特に稈麦、大麦など変化が大きい。以上は28年、29年両年度ともに同様な結果を示した。子実収量は30年度の試験結果を待つて検討を加える予定であるが、過去2ケ年の試験から子実収量を減ずることなく早生種をさらに早熟化させる可能性があるので、このことは経営上大なる利点であると思われる。